



Let us be like an unpolished Diamond. Never mind of the outward rough appearance if we could have shining part within.

磨く前のダイヤモンドのようであれ。内に輝くものがあるならば、荒削りの見かけを決して気にしてはいけない。

(訳出は『現代語で読む新島襄』に拠る)

布施 智子 (同志社社史資料センター社史資料調査員)

学生時代、有終館前にある掲示板上に、1カ月だけ掲示されていた日本語訳がたまたま目に入った。

「ほとんど失敗していいのだ、とりあえずやってみよう。」

この言葉に出会った時に感じたことである。大学入学まもない頃、初めて「大学の学問」というものに触れ、完璧でないといけないのではないかと萎縮気味であった。しかし、その折にこの言葉を知って、そっと背中をおしてくれたような心強さを覚えた。同志社というところは、完璧ではない「荒削り」な自分を受け入れてくれる場所だと解釈したのである。新島が同志社で育てたいと考えた「良心の充満したる丈夫」、「個儻不羈」といった言葉よりも、すんなりと理解できる言葉でもあった。

時が経って、同志社の歴史に携わるようになり、この言葉の由来を探ってみた。1885年2月13日、第2回欧米旅行中の新島が、静養先のクリフトン・スプリングスで雑記帳に記した言葉である。「A Policy for our Training School (わが校の方針)」と題した所感の一節で、開校10年を迎えようとする同志社の中身の充実を願ったものである。文脈から考えれば、この言葉は、人物像をさして語られたものというよりは、器としての同志社の在り方をさしていると考えるのが自然だろう。

今は学生とは違う立場で同志社という場に関わっているが、やはりこの言葉が強く心に残っている。「荒削りの見かけ」を気にしないということだけではなく、そういう人物をのびやかに育てる土壌を作ること意識するようになったのは、立場の違いから加わった解釈であろう。